

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 1 日現在

研究種目： 基盤研究(C)
 研究期間： 2007 ～ 2009
 課題番号： 19520148
 研究課題名(和文) 中世女訓書と〈知〉の継承に関する研究
 研究課題名(英文) Research on succession of wisdom in "Jyokunsho"
 研究代表者
 榊原 千鶴 (Sakakibara, Chizuru)
 名古屋大学・大学院文学研究科・助教
 研究者番号： 50313979

研究成果の概要(和文)：2007年度～2009年度研究期間中の成果は、1)中世期の代表的な女訓書である『女訓抄』の注釈作業、2)『月庵醉醒記』(中)(下)(2007年～2010年刊行、三弥井書店)における担当箇所の本文・頭注・補注の執筆、1)と2)をふまえた論文の執筆、3)“知”の継承という観点から、明治期の女性教育を対象とした論文と評伝の執筆、および、同テーマによる韓国研修生向けセミナーの開催等である。

研究成果の概要(英文)：During the study period from 2007 to 2009 results are: 1) annotations work of "Jyokunsho", annotations work of "Getsuansuiseiki" (2) (3) from 2008 to 2010 published by Miyai bookstore, and writing of research papers based on 1 and 2, 3) writing of research papers and critical biographies, seminar for university students in South Korea about women's education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：女訓書・女性教育・“知”の継承・『女訓抄』・『月庵醉醒記』・『からすまる帖』・近代化

1. 研究開始当初の背景

科学研究費基盤 C (一般)「女訓書の研究」
 (2000年度～2002年度)、同「中世にみる女

性教育と基礎教養の研究」(2004年度～2006年度)での研究成果を受け、従来、文学研究では取り上げられる機会の稀な領域であった女訓書というジャンルに注目することで、社会文化史・政治思想史における「女訓」という視座の有効性を問うことをめざした。

2. 研究の目的

女訓書というジャンルは、女性に向けての教訓書という位置づけから、その限定性・閉鎖性を思われ、文学研究では取り上げられる機会の稀な領域である。わずかに嚆矢とされる『にはのをしへ』が、作者とされる阿仏尼との関係から言及される程度であり、ジャンルそのものについての検討や、作品の紹介および注釈的作業、他ジャンルとの関係をふまえた文学史上での位置付けなどは、ほとんどなされてこなかった。

もちろん、往来物に関する研究をはじめとして、作品のいくつかは教育史研究の場でとりあげられてはきたものの、作品世界そのもののありかたを、ジャンル横断的に明らかにするまでには至っていなかった。

研究代表者は、本研究テーマに着手する以前、軍記物語研究を主として行ってきたなかで、たとえば『源平盛衰記』に女訓的要素のあること、さらにそれが、中世以降近代に至る女性教育の場で利用されてきた事実を確認していた。そこで、科学研究費基盤C(一般)「女訓書の研究」(2000年度～2002年度)の援助により、『中世の文学 源平盛衰記(六)』(共著者：美濃部重克、三弥井書店、2001年)を出版すると共に、その作業過程で、戦時期を想定した女性教育のありかたという問題意識のもと、近代までを視野に入れ、女性教育にみる軍記物語受容の問題として、研究成果を論文にて発表した。同時に、中世の代表的な女訓書のひとつである『女訓抄』を翻刻し、解説とともに『伝承文学資料集成 女訓抄』(三弥井書店、2003年)で紹介し、その思想的背景に南北朝から室町期にかけて浄土宗や浄土真宗で説き始められた女人正機説のあることを明らかにした。

一方、女訓の世界を中世の〈知〉の大系において捉える作業の一環として、『月庵醉醒記』輪読会に参加し、担当箇所の注釈作業を通じて、中世期の教養の内実とその諸相についての理解を深められるよう試みた。とくに『月庵醉醒記』と『女訓抄』に共通してみられる節用集的知識の比較検討によって得た研究成果は、科学研究費基盤C(一般)「中世にみる女性教育と基礎教養の研究」(2004年度～2006年度)の援助を受けて、『中世の文学 月庵醉醒記(上)』(三弥井書店、2007年)の執筆担当箇所に盛り込んだ。

以上の研究成果をふまえ、本研究では、女性教育を〈知〉の継承という観点から捉え、社会文化史・政治思想史における「女訓」という視座の有効性を考えると共に、主として中世期に行われた「教養」の内実と、「教育という営為」を学際的見地から明らかにすること。さらに、戦時下を視野に入れた女性教育という観点から、徴兵制により、軍事国家として始まった日本近代における女性教育までも見通す研究展望の獲得を目的とすることにした。

3. 研究の方法

(1)中世の代表的な女訓書である『女訓抄』の全注釈作業を行う。

①『大東急記念文庫善本叢刊』所収の寛永16年古活字版を底本とし、穂国文庫本・寛永19年整版本・大阪女子大学写本との校合のもと、校訂本文を作成する。

②①の本文に、注釈・補注からなる全注釈を付す。

(2)『月庵醉醒記』輪読会での講読を基に、服部幸造・美濃部重克・弓削繁編『中世の文学 月庵醉醒記』の注釈作業に参加し、担当箇所の校訂本文の作成、頭注、補注を執筆する。

(3)(1)(2)の作業過程を通しての考察をふまえ、中世女訓書と、他ジャンル作品にみる女訓的要素に関する論文を執筆する。

(4)女訓書にみる“知”の継承という観点から、近代、とくに明治期の女性教育に関する論文を執筆する。

(5)(4)での考察を基に、日本の近代女性教育について、海外の大学生(韓国からの短期研修生)向けにセミナーを開催し、その概要を紹介する。

4. 研究成果

「3. 研究の方法」をふまえ、以下の成果を挙げることができた。

(1)『女訓抄』の本文校訂と全注釈作成
全10章中、第8章半ばまでの本文校訂を終えると共に、注釈・補注からなる全注釈形式の原稿を執筆した。

(2)『月庵醉醒記』輪読会参加と『中世の文学 月庵醉醒記』担当箇所の執筆

①月1回の輪読会参加。

②『中世の文学 月庵醉醒記(上)』(2007

年、三弥井書店)の注釈作業に参加し、以下の担当箇所の校訂本文の作成および頭注・補注を執筆した。

[013-09] P. 110・P. 247~P. 248、[026] ~ [071] P. 136~P. 149・P. 282~P. 285

③『中世の文学 月庵醉醒記(中)』(2008年、三弥井書店)の注釈作業に参加し、以下の箇所の校訂本文の作成および頭注・補注を執筆した。

[082-01~03] P. 37~P. 45・P. 140~P. 142、[085-01~085-06] P. 53~P. 60・P. 167~P. 173、[089-02~03] P. 82・P. 181~P. 184

④『中世の文学 月庵醉醒記(下)』(2010年、三弥井書店)の注釈作業に参加し、以下の担当箇所の校訂本文の作成および頭注・補注を執筆した。

[140] P. 85・P. 212、[141] P. 86・P. 212~P. 213

(3) (1) (2)の作業をふまえて、中世女訓書と他ジャンルの作品、さらに近代までを視野に入れた以下の論文を執筆した。

①齋宮歴史博物館で開催された「特別展 ヒーロー伝説—描き継がれる義経—」の企画に協力し、同館所蔵『源平盛衰記画卷』を翻刻・紹介するとともに、軍記物語に登場する女性像が、その後の女性教育においていかに位置付けられる、利用されたかを、日本の近代化の歩みと、表象の面から捉え、その考察を「明治期の〈常盤〉と〈静〉」として文章化し、図録に寄稿した。

②『中世の文学 月庵醉醒記(中)』で担当した「男女のうはさ」の注釈過程で、「二条殿、女君にやり給ふ文」に引かれた『仮名教訓』(『からすまる帖』)の伝本蒐集を行い、それを切っ掛けとして、近代における受容の有様を、「明治24年の『からすまる帖』—福羽美静にみる戦略としての近代女性教育—」で論じた。

③女訓書にみる〈知〉の継承という観点から、『平家物語』など軍記物語に登場する女性像が、近代の教育現場でも利用されていることを、「『女子の悲哀に沈めるがごとく』—明治20年代女子教育にみる戦略としての中世文学—」で論じた。

④『中世の文学 月庵醉醒記(中)』で担当した「男女のうはさ」に引かれた『仮名教訓』(『からすまる帖』)の受容史を追う過程で、近代におけるひとつのありかたとして、跡見花隠に注目し、明治初期の女性教育と習字という側面から、「『世界の花とならむ事を望む』—跡見花隠にみる“知”の継承と明治初期の女性教育—」において、女訓と習字手本というふたつの役割について論じた。

(4) 女訓書にみる“知”の継承という観点から、近代、とくに明治期の女性教育に関して先駆的な役割を果たした女性たちの評論を執筆した。

①〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(1) 青山千世

① (ジ・アース教育新社)

②〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(2) 青山千世

② (ジ・アース教育新社)

③〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(3) 若江薫子

① (ジ・アース教育新社)

④〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(4) 若江薫子

② (ジ・アース教育新社)

⑤〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(5) 美子皇后

① (ジ・アース教育新社)

⑥〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(6) 美子皇后

② (ジ・アース教育新社)

⑦〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(7) 美子皇后

① (ジ・アース教育新社)

⑧〈知〉の継承から考える明治期の女性教育—先駆者の気概に学ぶ—(8) 美子皇后

② (ジ・アース教育新社)

(5) (3) (4)の考察をもとに、セミナー・講演を行った。

①韓国東国大学、木浦大学の研修生向けに実施されたセミナーで、日本近代の女性教育についての講義を担当した。

②名古屋大学中央図書館友の会主催「ふみよむゆふべ」例会で、「女性が学ぶということ—日本文学にみる〈女訓書〉の世界—」と題して講演を行った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

①榎原千鶴「『世界の花とならむ事を望む』—跡見花隠にみる“知”の継承と明治期の女性教育—」、『名古屋大学文学部研究論集』、56巻、135-149、2010年、有

②榎原千鶴「明治二十四年の『からすまる帖』—福羽美静にみる戦略としての近代女性教育—」、『名古屋大学文学部研究論集』、55巻、1-15、2009年、有

③榎原千鶴、「明治期の〈常盤〉と〈静〉」、『齋宮歴史博物館 特別展 ヒーロー伝説—描き継がれる義経—』、54-56、2007年、無

〔図書〕(計3件)

- ①服部幸造・美濃部重克・弓削繁・榑原千鶴・小助川元太・小林幸夫・佐々木雷太・辻本裕成・堤邦彦・徳竹由明・中根千絵・中本大・二本松泰子・日沖敦子・藤井奈都子、三弥井書店、『月庵醉醒記(下)』2010年、322頁
- ②飯田祐子・吉田司雄・島村輝・高橋修・中山昭彦・榑原千鶴・中谷いずみ・久米依子・坪井秀人・生方智子・横濱雄二、青弓社、『少女少年のポリティクス』、2009年、286頁
- ③服部幸造・美濃部重克・弓削繁・榑原千鶴・小助川元太・小林幸夫・佐々木雷太・辻本裕成・徳竹由明・中根千絵・二本松泰子・日沖敦子・藤井奈都子、三弥井書店、『月庵醉醒記(中)』2008年、325頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

榑原 千鶴 (Sakakibara, Chizuru)
名古屋大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号：50313979